

『即興ダンスセラピーの哲学——身体運動・他者・カップリング』

鈴木信一〔著〕、晃洋書房、2021年

〔評者〕

河本英夫

KAWAMOTO Hideo

即興ダンスを障害者向けに活用する企ては、「ともかく何かを開始してみる」というところから始まった。即興ダンスそのものを精神科病棟のホールで提供する試みは、ヨーロッパではいくつかの病院で試みられ、「アートセラピー」の一つの事例となっている。精神状態に固有の複雑さと弾力を回復させるさい、言葉や理解力から誘導するのではなく、むしろダンスそのものの動きの経験に、患者自身が参加してみるというかたちで、参加の機会を提供していくことは、経験の局面を変えていくための貴重な挑戦でもある。

おそらく身体の動きは、それだけ基本的な能力であり、身体の動きから経験を変えていくことは、いわば当人にとっても「総力戦」でもある。その分だけ実際には難題であり、とても困難な課題である。たとえばある種の精神疾患の人に、治療者が眼前で「ガッツポーズ」を行い、その鏡に映った像を真似てやってみてください、という課題を行うだけでも、効果がでることがある。こうした課題が、身体と精神の連動する仕組みそのものに、変化のきっかけをあたえることがある。

本書での事例（症例）で見る限り、比較的重度の発達障害者の治療に、ダンスセラピーが試みられている。発達障害と言っても、重軽度の幅はとても広い。たとえばしばしば周産期のアクシデントによって生じるような、寝返りをうつことも困難な重度の障害者も一定頻度で生じる。こうした患者は多くの場合、遺伝性の欠損はなく、発達の初期に重大なアクシデントを通過したことで生じる症例である。このタイプの重度の発達障害は、補助をあたえて寝返りの経験をするだけでも、当人に無類の笑顔が出ることがある。実際に比喻を超えるような「天使の笑顔」が出る。他方、認知的な欠損によって、社会適合の困難な「自閉症スペクトラム」に配置されるような、ある意味で「局所的」な症例まで、発達障害には広く多様な分岐が見られる。そこには実際、同じ「発達障害」という言葉で呼ぶことが無理なほどの広がりがある。

本書のダンスセラピーの症例で扱われているのは、自己制御による一人

での歩行が難しく、何よりも歩行時に他者の支えをうまく受容できないレベルの事例である。発達障害には、現時点で明確な治療指針があるわけではない。誰が試みても悪戦苦闘であり、容易に成果はでない。同じように見える歩行の困難な障害者も、それぞれに固有の障害がある。この障害は、圧倒的に多様である。そのため本書で扱われる症例は、医療としても、教育としても、さらには人間のそのもののかかえる謎としても、貴重な企ともなり、資料ともなる。

このレベルとタイプの障害者に対して、医学的な理論と呼べるほどのものは現時点ではほとんど見当たらない。だからそもそものところ試行錯誤しかない。そんなときでも何か指針となるものがあつたほうが手掛かりとなる。本書は、それをハイデガーの実存思想、メルロ＝ポンティの身体現象学、オートポイエーシス・システム論に求めている。

哲学やシステム論から、治療指針が出てくるわけではない。かりにそんなことが可能なのであれば、哲学を勉強すれば、ただちに立派なセラピストになることができることになる。哲学にもシステム論にもそんな能力はない。発達障害にかかわるにあたって、自分自身にとっての手掛かりのようなものは必要である。それは自分の傍らにいるコーチのようなもので、このコーチを自分のために作っておく必要がある。それが哲学であり、システム論である。必要に応じて参照し、必要に応じて書き換えることもできるコーチが必要なのである。

セラピーの行為は、「実践的な課題」を担っている。そのさい何かの手掛かりとなり、アイディアの源泉ともなるコーチが傍らにいたほうがよい。だがそのときコーチの設定を誤る可能性にもつねに晒されている。コーチの条件として、具体的な課題に対して、より詳細な設定が可能となる仕組みが備わっていることが望ましく、また人間が帯びる病的な変異に対して際限なく開かれていることが望ましい。

哲学は多くの場合、健常者をモデルにしており、健常者である「人間」の本来性を問うような仕組みで語られることが多い。また過度に議論を一般化しすぎている。たとえば「人間」という場合、誰をイメージすれば「人間」を捉えたことになるのか。さらに個人が固有の環境をもつのであれば、哲学の語る「世界」とは何なのか。哲学は、ほとんどの場合、学び修得するだけでは足りていない。むしろ哲学にとって、修得したものを捨てていく覚悟が必要となる。捨てていくというプロセスにおいて最も多くものを学ぶのが「哲学」という学問である。捨てることのさなかで多くの経験をするのが、哲学的経験である。

これは正直に言えば、初級者には「きつい」作業である。学ぶことに時間と労力がかかる上に、そこからさらに捨てる作業が必要となる。「往還」

という経験の仕組みで言えば、往くことではなく、還りの経験がより重要となる。その部分については、本書では「哲学」をさらに有効に機能させるための各哲学に対する課題設定が行われ、各哲学の有効な展開見通しが付けられている。

オートポイエシス（自己制作）について少し解説をしておく。この構想を主導的に作ってきたチリの神経生理学者であるマトゥラーナは、2021年5月に亡くなった。弟子のヴァレラよりも20年も長生きしたことになる。ヴァレラは、肝ガンが全身に転移して亡くなった。それ以前にオートポイエシスを社会学の普遍的理論として展開したドイツの社会学者のルーマンは、1996年に亡くなっている。

この構想をどのように活用し、作り替えていくかについては、多くの課題が含まれていた。一見したところ何が語られているのか、分からない構想だった。私がドイツに滞在していたころ、周囲の哲学者は「この構想は、構造決定論の議論だ」と語っていた。こんな筋違いの理解が生じるほど、解釈の分かれた構想だったのである。

端的に、この構想の定式化では、プロセスのなかで個体が出現する仕組みが語られている。「個体化のプロセス」の仕組みが問われているのである。

何故これが重要なのか。個体は科学的には、断片的な指標で語られるよりない。たとえば背の高さでみれば、長さという座標軸のもとで特定の値を指定することで、個体は特徴づけられる。体重については重さという座標軸のもとで特定の値で個体は指標される。この場合断片を切り取るようにしてしか個体の特徴づけることはできない。科学的な議論の仕方では、個体の固有性に届くことができるのか。この問いは、ガリレイ・ニュートン・タイプの科学全盛のなかでも、すでに気づかれていた。

たとえば外に座標軸を張り出してしまえば、その座標軸に張り出された値を個体の特徴だと語るしかない。このやり方では、個体の個性に届かないのである。部分的な影を見ているようなものである。むしろ個体はみずから個体となる。この同語反復に似た表現に実質的な内容をあたえるのが、プロセスのさなかでの個体の出現の仕組みであり、オートポイエシスの定式化で語られていたのは、この仕組みそのものだった。

個体化のプロセスを導入すると、個体は固有に個体化することになる。そのため圧倒的な多様性が構想内在的に含まれており、このレベルでは健常者と非健常者を区別する必要はなく、非健常者とは一つの個性のことである。個性とは、みずからがおのずと行為をつうじて形成するものだが、多くの障害者がそれとして個性であるわけではない。個性形成にみずから進むことができないからこそ、障害なのである。本書は、この個性形成に

進む可能性を求めて、多くの選択肢と多様な手掛かりを探り出す試みである。

ちなみに哲学史のなかで、個体についての代表的な構想が、ライプニッツの「モノド論」である。モノドは個体であり、世界内の最終の要素単位である。モノドには、二つの異質な能力が備わっており、一つは情動にかかわるような運動性の働きであり、もう一つが世界を表象する認識の能力である。ところがライプニッツでは、モノドそのものは作り付けになっており、モノドがモノドになるのは、情動や表象能力によるのではない。そうするとモノドがそれとしてモノドになっていく、「モノド化」のプロセスが必要となる。このモノド化のプロセスに一つの定式化をあたえたのが、オートポイエーシスである。個体化とは、これまで届かなかった課題に新たな定式化の仕方を示すものだった。

個体化の仕組みを考案するさいに、シェリングやゲーテは別のやり方をしていた。相反する引力や斥力、産出や阻止、光と闇のように、相反的双極性を取り出して、そこから個体化を構想していた。こういう仕方を「ダイナミクス（動力学）」という。同時代での使える素材（電気のプラス、マイナス、磁気のNS）を使った構想だが、ダイナミクスのやり方では、議論が詳細になっていくさいに直ちに限界に当たってしまう。ダイナミクスは、いまだアナログ的である。そこでまったく組み立てを変えて、デジタル的に組み立てると、オートポイエーシスのようになる。ここまでの下準備をしておけば、本書が何を企てたのかが、よくわかる。

本書の研究目的では、以下のように語られている。

本書では、1970年前後に日本で生まれた舞踏を基にした即興で行なうダンスセラピー（以降、即興ダンスセラピーと記す）を扱う。即興ダンスセラピーを健常者、非健常者を問うことなく試みることによって、さらに動作の選択可能性の拡大、他者との連動可能性の向上といった効果を得ることができる。その一方で、即興ダンスセラピーにおける動きそのもの、他者との連動状態を肌理細かく記述し、その効果を具体的に分析することは難しいとされる。そこで本書ではハイデガーの存在論、メルロ＝ポンティの身体運動論、システム論におけるオートポイエーシス、カップリングの手法を身体運動に展開し、動作単位産出システム、カップリング・システムを仮説設定した上で、即興ダンスセラピーの実践を記述し、現場で展開される実践の構造、実践による効果を明確にし、即興ダンスを行う者がその遂行において、他者との連動を成功させ、動作の選択可能性を拡げ、他者および物理的環境、さらに社会への自在な「適応」を可能にし、様々な効果を獲得するこ

とのメカニズムと諸条件を提供することを目的とする。(2-3頁)

ここで言われている日本で生まれた舞踏が、通称「暗黒舞踏」と呼ばれるものである。大きな流れとしては、土方巽と大野一雄が戦後基本形を作り、その後さまざまな集団が、固有の表現を模索して現在に至っている。この舞踏の愛好者は、現在世界で20万人近くいると言われている。

身体の情動性をそれとして前景に出したのが、天児牛大^{あまがうしお}をリーダーとする山海塾であり、著者の鈴木信一氏が日頃親しくかかわっていたのが、山海塾のメンバーの一人である岩下徹さんである。岩下徹さんは、舞踏を経験の形成に活用する「哲学的なダンサー」でもある。現在活発な活動を続けているメンバーとしては、俳優を兼業している田中泯や、宇宙的・神話的な身体を繰り返し表現していく笠井劔がいる。いずれの場合も、人間の向こう側に越境し、人間の手前に遡行する多くの果敢な企てが実行されている。人間と人間身体の可能性を最大限拡張し、どこまでも人間とは可能性を生きることだという確信と覚悟のようなものがある。その場合、たとえば障害者と生きることは、それじたい一つの表現でもある。

本書の課題でもある「障害者とのカップリング」を形成するさいには、認知の能力、運動能力のなかで、何を接点として活用でき、さらにはどこに働きかければ行為や動作に変化を生み出すことができるのかについて、大まかに当たりを付けておかなければならない。カップリングとは、異なるシステムが相互に決定関係のない媒介変数を共有しあうことであり、それぞれのシステムに選択肢があり、それぞれの行為をつうじて変数の値もそのつど変化して行く。何をカップリングの変数として活用できるのか。そのつど見極めていかなければならないが、そのためにも活用可能な変数一覧を吟味しておく必要がある。

恒常的に活用される構成素として、「注意」「運動感覚・内部感覚の感じ取り」「予期」「身体・運動のイメージ形成」「配置」「肌理・隔たり・方向の調整」「反復・リズム化」が取り出され、選択的に活用されるものとして、「呼吸の調整」「皮膚感覚の感じ取り」「表象イメージの形成」「眼差しによる感じ取り」「情態性/気分」が取り出されている。

こうした分析的な作業は、本書が世界ではじめて明るみに出したものである。認知科学の成果や現象学の成果をふんだんに盛り込んだ一覧表でもある。障害者とのカップリングでは、仲良く一緒に踊るといような局面はほとんどない。多くの場合、一緒に動作することが困難な人たちとの間に動作の連動を作り出し、そこからさらに障害者本人の経験の可能性を拡げていかなければならない。

ただしこれだけの要素を取り出すと、障害者の障害モードによって、優

先に対応しなければならない構成素は入れ替わるであろうし、またどこがそれぞれの障碍において最も解決の必要なモードなのかの推測も必要となる。ここがリハビリの内部で獲得されるべき「病理」である。こうした病理は、まさにカップリングのさなかにおいて確認される事項であり、一般の医師による診断書やカルテには出てこないものである。現場においてしか見えてこないものは多々あり、またセラピストの腕の良し悪しがおのずと出てしまう場面でもある。

たとえば症例自身が歩行に困難を抱えるさいには、環境への知覚が身体運動につながっていかない局面を抱えることがほとんどである。症例が何かを実行しようとする時、それが自分の身体と共にどうすることなのか分からないことがほとんどなのである。知覚情報があれば、身体が動くというのは、健常者の場合の話で、多くの感覚知覚情報と、身体の運動性の内感とはつながっていない。そこでこうした場面での情報と内感のつながりも作っていかなければならない。このあたりのことは、腕の良い理学療法士と知り合いになり、発達障害について、さまざまな症例の話を予備的に聞いておくことが望ましいと思われる。

実際には、支援者やセラピストとともに、歩行することの実行のなかで症例本人の動作能力を形成していくよりない。事実として症例提示されるものは、比較的成功的な事例であり、失敗した場合には、何が起きたのかは、当人にもセラピストにもわからない。こうした場面での試行錯誤が、カップリングの形成である。本書にも、いくつも貴重な事例が挙げられている。

Aさん(女性)の事例では、以下のような試みが行われている(第5章第1節)。まっすぐに歩く直線歩行だけではできるが、それ以外の歩行を自分からは実行しないタイプ的女性に対して、たとえば床に曲線を引きその線に合わせて歩行してもらうような課題を課す場合には、知覚情報から歩行の方向付けを誘導するような仕方になる。しかしこれではすでに方向調整ができる歩行者の場合には有効だが、そもそも方向調整ができない場合には、こうしたやり方を取ることができない。方向調整という動作の経験を作っていかなければならない。その場面での事実記述は、以下のようになっている。

Aさんは、全身の体重をかけて足を地面・床に落とすように一歩ずつ前に踏み出す。その動作を一定のリズムで繰り返し、まっすぐに歩いていた。ダンサー1はAさんの眼前約2,3メートルに座り、進行の障がいとなり、Aさんは体の向きを柔軟に変えつつ、動きのリズム、バランスを崩すことなく向きを変え、引き続き直進した。ダンサー1

はAさんが進む可能性のある範囲内、視野内に自らを配置して座る動作を繰り返し、Aさんはその手前2、3メートルあたりからダンサー1にぶつからないように蛇行しつつ直進することを繰り返した。(117頁)

こういう場面で、症例本人に、歩行時の方向調整のための変数が、獲得されようとしていると見ることができる。体験的な動作の形成は、こうした作業の繰り返しである。物との衝突を回避する動作は、身体が環境世界内でそれとして在ることの最も基本的な能力であり、物の存在は、それを回避するという動作と、それに伴う触覚的感触によって捉えられていることがわかる。物の身体的感触は、通り抜けできないこと、衝突すれば跳ね返されることの予期のなかで形成されている。

こうした作業は、実は片麻痺の歩行回復の場面でも活用されている。片麻痺の場合、麻痺側は歩行時に外回りになることが多い。外回とか「ブン回し」とか呼ばれる。そんなとき足をまっすぐに出すように意識を集中し、意識の制御によって歩行動作を矯正しようとしても、うまく行くのは意識に極端な負荷をかけたときだけで、日常の場面ではやはりブン回しのままである。むしろ壁に沿うように歩行動作を行うと、壁との衝突を避けるようにして、歩行動作がおのずと改善されることが知られている。

本書の大きな成果は、カップリングの形成プロセスのモードについて、詳細に検討したことである。そこでは、隣接モード、誘導・応答モード、イメージ・役割設定モード、共振モードの4つのモードが提示されている。そしてこれらの4つのモードのなかで、どの組み合わせが、オーバーラップしやすいかを明らかにしている。こうした作業も世界ではじめての企てである。カップリングした状態でのプロセスを進めて行くと、モードが切り替わることがしばしばある。そのさいにはセラピストの側が、最も有効なモードを繰り返し探り当てるように進めて行く必要があることがわかる。

本書全体は、学際的で新たな探求領域を形成していくような企てである。それを総合人間学と呼んでも、領域間創発研究と呼んでも、言葉を無理に捏ねまわしている印象が残る。試みられているのは、人間の能力の開発であり、人間の可能性の拡張である。そしてその形成プロセスにはさまざまな回路がある。そのため心理学、認知科学、医療、教育、身体訓練のそれぞれの現場に対して、さまざまなアイディアと知見を提供してくれる教材ともなっている。多くの課題を投げかけた良書となっている。正直によくやったと思う。